

# 活動報告

関西学院史  
紀要  
第三十号

## 刊行物

『関西学院史紀要』第30号（2024.03.15発行）目次

### 論文

関西学院〔高等学部文科英文学科・文学部英文学科〕の英語教育と研究—竹友藻風、志賀勝、曾根保、岩橋武夫、寿岳文章を育てた人びと—（下）／井上琢智

寿岳文章—知識人の肖像—／中島俊郎

上海と周辺地域におけるW・R・ランバスの活動／趙怡

### 書評論文

書評 神田健次著『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉅脈』を読み解く（二）—中国でのアメリカの圧倒的存在感とエキュメニカル思想を貫いたランバース—／福井幸男

書評 池田裕子著『関西学院のエスプリを追って—カナダ、アメリカ、ラトビアへ—』—ファミリー—ヒストリー「草刈正雄」をはるかにしのぐ感動のドラマ—（関西学院大学出版会、2023年5月25日刊行）／福井幸男

### 資料

神崎驥一日記 四／井上琢智

### 記録

第55回関西学院史研究会（2023.11.7）

戦間期（1919～39）前半における関西学院—『恒久平和』運動と英文学教育・研究—／井上琢智

第56回関西学院史研究会（2023.12.1）

寿岳文章の仕事：民藝運動への貢献を中心に／神田健次

### 寄稿

《評伝》松本道弘—英語道—／松本篤弘

### 学院史編纂室共同研究報告

「宣教師研究」舟木謙、「関西学院の戦前・戦中・戦後」井上琢智、

「関学オーラルヒストリー」山泰幸、

「関西学院の学問と社会」荻野昌弘

## おもなイベント

2023.11.07 「第55回関西学院史研究会」開催

演題：戦間期（1919-39）前半における関西学院—「恒久平和」運動と英文学教育・研究—

講師：井上琢智氏（元関西学院大学学長、元経済学部教授、学院史編纂室主任研究員）

2023.12.01 「第56回関西学院史研究会」開催

演題：寿岳文章の仕事：民藝運動への貢献を中心に

講師：神田健次氏（関西学院大学名誉教授（元神学部教授）、学院史編纂室顧問、神戸バイブルハウス理事長）

2023.10.03 駐日ラトビア共和国特命全権大使による講演会開催 経済学部主催（学院史編纂室共催）

テーマ：“Mission Latvia. A country where determined people have a mission and ambitions”

—ラトビア、鋼の意思を持つ人々がミッションと大志を抱く国

講師：ズィグマルス・ズィルガルヴィス氏（駐日ラトビア共和国特命全権大使）

## 編集後記——学院史への「扉」

『学院史編纂室便り』再開号をお届けいたします。

この号は、『資料室便り』No.1(1985)から数えて第57号にあたります。学院史編纂室の前身「学院史資料室」は、1978年に旧図書館で発足しました。その後、1984年に旧日本人住宅（現在の関西学院会館）、1998年に現在の時計台1階へと移り、2000年に「学院史編纂室」へと改組しています。

1990年代には、『関西学院百年史』（全4巻・索引）が刊行されました。その間、『資料室便り』は休止しますが、1998年に判型をB5からA4に改めて再開します。2000年に『学院史編纂室便り』へと改称し、以来、年に2回、2022年度まで継続的に発行してきました。この間のご協力に感謝いたします。

この度、新たなデザインとともに『学院史編纂室便り』を再開いたします。再開にあたっては、英語誌名を Kwansai Gakuin Archives Newsletter と定め、表紙に掲げました。中央の「57」は号数で、1985年から積み重ねてきた『便り』の歴史を示しています。上部中央のロゴマークは、時計台と書物をあらわしています。表紙を縁取る枠線は、学院史編纂室入り口の「ドア枠」を模しています。

第57号では、これまでの学院史編纂を担ってきた方がたに「学院史」の意義と展望、編纂の経験について寄稿していただきました。また、キャンパスの記憶を記録するために、2024年3月で歴史を閉じた第2教授研究館（池内記念館）についてのエッセイをお寄せいただきました。本誌をお読みいただいているみなさまにも、寄稿をお願いすることがあるかと思えます。その際には、よろしく願っています。

学院史編纂室では、年2回の『学院史編纂室便り』とともに、年1回、『関西学院史紀要』を刊行しています。2023年度には、第30号を発行いたしました。「紀要」では、関西学院の歴史に関する論文や資料を掲載・発信しています。みなさまの専門の立場から、関西学院史の研究を進めていただき、その成果を投稿していただけたらと願っております。

本誌の新しい表紙が示しているように、学院史編纂室は、西宮上ヶ原キャンパスの時計台1階に位置しています。時計台の正面から入ると、すぐ左側にクラシカルなデザインの木製「扉」があります。そこが、学院史編纂室の入り口です。時計台にお越しの際は、本誌表紙の枠線と同じかたちの「ドア枠」を、ぜひご覧ください。そして、学院史編纂室にご用の際は、お訪ねいただけたらと思います。

（学院史編纂室長 赤江 達也 あかえ たつや）